HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	総括コメント
Author(s)	石森, 秀三
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 147-151
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61211
Type	other
File Information	CATS9_14ishimori.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

西山徳明，西川克之，花岡拓郎，平井健文編
『自然災害復興における観光創造』
CATS 叢書第 9 号: 結章 147-151，北海道大学観光学高等研究センター（2016）

総括コメント

石森 秀三
北海道博物館長／北海道大学観光学高等研究センター特別招聘教授

まず 2 日間にわたりまして，非常に貴重なご発表をいただいた皆さま方に厚く御礼を申し上げます。それぞれに大変素晴らしい発表をいただき，さまざまな議論が為されました。そこで私の方からは個別の発表についてはあまり触れずに総括コメントをさせていただきます。お手元にレジュメを用意しました。新たに付け加えることはないようにも思えますが，私なりに震災復興という課題に対して観光領域に何が出来るのかを考えているところです。レジュメにある“Pro-Sufferer Tourism”とは私が創った概念で，まだ十分に流布されていませんが，東日本大震災の後に立命館大学で開催されたシンポジウムで基調講演をした際に構想したものです。立命館大学に地域観光学専攻を設置するということでシンポジウムが開催され，基調講演を依頼されました。その際に震災復興に寄与する観光イノベーションという視点から，この概念を発想しました。

この Pro-Sufferer Tourism という概念を発想した 1 つの原点は，貧困と観光に関わる Pro-Poor Tourism にもとづいています。この概念のことはずっと気がかりなままで手つかずにしていたのですが，この貧困と観光の問題と同じく，災害と観光の問題もこの 2 日間の議論の中にもありましたように厳しい側面がさまざまに存在します。私はもともと文化人類学者であり，地域や現場やフィールドに密着して物事を考えるという姿勢は恩師の梅棹忠夫先生から叩き込まれました。災害の問題を考える際にも，Pro-Poor Tourism とのアナロジーで考えると，Pro-Sufferer Tourism も当然ありうるのではないかかと考えております。

室崎先生と同じく，私も 1995 年の阪神淡路大震災の後に，国が被災地域の観光を検討する際に委員長を務めさせていただきました。今から振り返ると不十分であったと思うこともありますが，その後，私は 2003 年に小泉政権の下で観光立国懇談会委員として首相官邸に呼ばれ，現在の観光立国政策の礎になる「観光立国の理念」について起草させていただきました。しかし，いま現在は日本の観光立国政策そのものについて非常なる絶望感を覚えているところです。海外からの訪日観光客は今年 1,900 万人に届くであろうという数字のみが踊っていて，観光立国の本質が横に置かれたままになっているからです。

Pro-Sufferer Tourism という概念に込めた想いは，被災者に寄り添う形で物事を考えないといけないということです。阪神淡路大震災の際には日本における「ボランティア革命」が生じたと言われ，東日本大震災ではさまざまな批判がありましたが，日本における「ボランティア・ツーリズム」の本格化だと取りざたされました。しかし，Pro-Sufferer Tourism は現実には「言うは易く行い難し」であり，私が本当に被災者の気持ちを理解できるかというとそれは簡単ではありません。若い頃には，褌一本でミクロネシアのサタワル島で 1 年間フィールドワークを行いましたが，異文化理解は本当に容易ではありませ

ん。Pro-Poor Tourism はアフリカ諸国で盛んですが，私がそれを本当に研究できるかというと非常に難しいと言わざるを得ません。

これと同じように，この研究会のテーマである，震災復興のために観光に何ができるのかを考える際には，やはりその中心に置かれるべきは「Pro-Sufferer（被災者のため）」という観点であろうと思います。「被災者」という存在を中心に置かずして，震災復興のための観光の問題は成立しないだろうと考えています。

先ほど，日本の観光立国政策に絶望感を抱いていると申し上げました。北海道の立場から見ると，日本のインバウンドが 2,000 万人になると，北海道の各地域が本当に元気になるのかといえば，大いに疑わしい。皆さま方も，今回の研究会に参加されるにあたって，ホテルの予約，飛行機の予約だけでも大変という現実があります。それだけ来道外国人観光客数は増加していますが，本当に北海道の各地域が観光で元気になっているかといえば必ずしもそうではありません。

現在の安倍政権のもとでは，「積極的平和主義」が唱えられています。これは安全保障関連法案の整備によって米国との軍事同盟の拡大を図り，自衛隊による軍事力行使を可能にして，平和構築に積極的に貢献するという立場です。しかし先日，ノルウェーの平和学者であるヨハン・ガルトゥング先生が，84 歳にして遥々ノルウェーから来日され，安倍首相の積極的平和主義に異を唱えました。ガルトゥング先生は半世紀ほど前に，positive peace と negative peace という概念を提唱されました。彼の言うところの積極的平和（positive peace）とは，単に戦争がない状態ではなく，貧困や差別などによる構造的な暴力のない状態のことであり，それに導くためにはさまざまな分野のコラボレーションに基づく取組みを積み重ねていく必要があります。

私はガルトゥング先生による積極的平和の実現に向けてのさまざまな取り組みを評価しており，そのような考え方と実践の在り方を観光領域に応用できないかと考えています。とくに最近の日本の観光立国政策はインバウンドの量的拡大にばかりこだわっており，非常に表層的な動きに終始していますので，ガルトゥング先生が何十年も平和学に打ち込んでこられた考え方と実践の在り方を応用できないかと考えています。

レジュメには，「消極的観光」と「積極的観光」という概念を記載しました。消極的観光とは地域や観光者にとっての他律的観光のことです。「他律的観光」というのは私が 20 数年前に唱えた概念であり，それと対になる概念は「自律的観光」です。他律的観光とは旅行業・宿泊業・運輸業などの「観光産業の御三家」が牛耳る観光の在り方であるのに対して，自律的観光は民産官学の協働によって地域資源を持続可能なかたちで活用しながら地域主導で振興する観光の在り方です。私は，地域主導による自律的観光こそが積極的観光であり，観光産業の御三家によって牛耳られる他律的観光，つまり地域にとっての消極的観光を変革していく必要があると考えています。つまりガルトゥング先生の積極的平和に対する思いと同じように，災害復興の観光を考える際に積極的観光としての地域主導の自律的観光に関わっていく必要があると考えています。

そして，この 2 日間にさまざまな議論がありましたが，重要なのはやはり心・精神の問題であり，室崎先生が「精神的エンジン」という言葉で表現されたものです。実は北海道大学に観光創造専攻を創設した時から，観光の研究もさることながら，私は日本人のライフスタイルを本当に変えていかないといけないと考えてきました。そのためにライフスタイル・イノベーションという問題を，観光創造専攻にとっても重要な課題と位置づけてきました。これを踏まえて，レジュメの 3 点目に「日本人の暮らしは本当に変わるのか」と書きました。東日本大震災については，実際に被災の現場にはいませんでしたが，テレビのニュースを見るたびに涙また涙の日々でした。決して私の友人知人や親戚が亡くなったわけではありませんでしたが，ただひたすら報道されるニュースの映像を見るだけで，今でも涙が出てきます。2011 年 3 月 11 日，やはりあの日から日本人の生活は少なからず変わりました。

東日本大震災を契機にした新しい生き方の模索というテーマを考える際には，米国の事例が参考になります。米国ではすでに 2008 年のリーマンショックをきっかけにして，マネー資本主義への批判が高まり，それ以前のオールド・ノーマルからニュー・ノーマルと呼ばれる新しい生き方にシフトする米国人が増えたと言われています。オールド・ノーマルとは，金がすべてを決する社会，マネーがパワーの源泉だと言われる社会です。これに対して，過去の豊かさや便利さと決別した，分相応な新しい生き方を模索する脱マネー資本主義が叫ばれ，これはまだ少数なのですが，米国にもこうした動きが 2008 年以降起きています。新たな状況・秩序の中で，これまでのやり方は通用しないのではないかと考える米国人が少なからず存在するということです。

同じように我々日本人にとっても，東日本大震災は生き方を改める大きな 1 つのきっかけになっているのではないかと考えています。お金に換算できない価値を大切にする生き方，お金がすべてではない人生の模索，所得の範囲内で誠実に生き，商品を賢く選択し，人々との絆や分かち合いを大切にして，家族や地域の人々とともに消費し，幸せを分かち合う生き方などがいま少なからぬ日本人によって問題にされ始めています。現在では，日本でもニュー・ノーマルな生き方が提唱され，里山資本主義，里海資本主義といった考え方も，少なからずこの日本の中で生じています。

そういう状況のなか，北海道大学の観光研究では観光創造を 1 つの大きな目標に掲げています。いま日本人のライフスタイルが少なからず変わろうとしている中で，観光創造学が一体何を為しうるかということが非常に重要なテーマになります。今回の研究会では，冒頭で真板先生は，1,000 年の時を経て受け継がれる地域の誇り，人々の心の大切さをご指摘くださいました。海津先生の発表にあった黒森神楽も，1,000 年にわたって絆を紡いできた地域の宝，地域の誇りであり，これもつまり心の問題です。これはまさに室崎先生がご指摘されたテーマと同じです。清野先生は山古志村を事例にご発表されましたが，私はかつて 2，3 日滞在しただけでも，山古志の方々は他の地域の人たちと違うなと感じました。やはりそこに山古志の心があるのです。

ここで，昨日室崎先生がお話しされていた観光の本義についてお話しします。これは言うまでもなく『易経』に由来するところですが，「国の光」という言葉にはさまざまな意味づけがあります。しかし私は，観光も大切でありますが，「発光」ということも重要ではないかと考えています。大学院の講義で観光開発論演習を担当した際には，冒頭で開発とは何かという話をする際に，私はいつも仏教で言うところの「開発（かいほつ）」の話をしていました。「開発（かいほつ）」とは仏性を開き発せしめることであり，我々はみんな 1 人 1 人の心に仏性がある。それに加えて，「一切衆生悉有仏性」，つまり生きとし生ける者はすべて生まれながらにして，仏となりうるという考え方もありますし，「草木国土悉皆成仏」という，日本の場合には国土までも仏になりうるという思想があります。東北は基本的には縄文文化圏であり，本当に「心の安らぎ」を得ることのできる地域であります。

レジュメに，「人知れず野辺に咲く一輪の花に心奪われるとき，人間は生きている」と記しました。これは，お父さんが米国人でお母さんが日本人という，禅宗のお坊さまの言葉です。これをある新聞の夕刊で 38 年ほど前に読んだ時，私は 32 歳でしたが，ものすごく心にドスンと来るものがありました。これは禅問答でありますが，この言葉を自分に当てはめて考えると，当時の私は一輪の花に心奪われることなどなく，まったく心に余裕がありませんでした。ということは，私は生きていなかったわけで，本当にそれでいいのかと自問しながら 38 年間を過ごし，まだこの言葉が心の中に残っています。観光で言うところの「光」とは何か，「国の光」，「地域の光」，さまざまに想定されますが，私は「人知れず野辺に咲く一輪の花」もやはり「光」になりうると考えています。もちろん，それを見る人次第で「光」にもなれば，ただの花にもなりますが。

北海道大学に観光創造専攻を創設する際に，私は「ツーリズム・ルネサンス」の実現のための大学院にしたいと念じていました。まさに昨日，室崎先生が復興とはルネサンスであるとおっしゃっていましたが，私はやはり地域のルネサンス，1 人 1 人の人間存在のルネサンスを可能ならしめる観光の在り方を創造できないかと考え続けております。そのために，今回の共同研究会の総括コメントとして，Pro-Sufferer Tourism というお話をさせていただきました。本来であれば私も現場やフィールドに出て行って，きちんと地域の人々と交わる中で観光の問題を考えたいところです。しかし，今は北海道博物館長になり，年齢も 70 歳になり，現場に出ていくことが難しくなっています。ぜひとも特に若い方々は，現場やフィールドに出て，さまざまな方々と交わる中で観光創造の可能性を考えていただきたい。そうした中で，さまざまな重たい問題・課題を抱えた被災地域であるがゆえに，さまざまなものがより心に迫って見えてくる可能性が高いのではないかと考えています。

2 日間，本当に長時間のお付き合いをいただきまして，篤く御礼申し上げます。西山先生のもとで，北大では新しい観光学が着実に進展していますので，ぜひとも今後もさまざ

まな形でのサポートをお願いいたしまして，私の最後の総括とさせていただきます。本当にありがとうございました。